



町民文芸

只見短歌会

七月詠草

大塚栄一

指導

やはらかく土に染み入る雨を待つか細き瓜の苗を植ゑ来て

小倉キミ子

馬場 八智

空梅雨のむし暑き朝入院せる吾より若き友の訃を聞く

関谷登美子

農道を歩く片辺に夕顔の白き花びら朝の日に映ゆ

新国由紀子

入院の父の足指洗ふわが髪の白きを父はつぶやく

五十嵐夏美

夕づきし校庭に子らの声高く打たれし球の音が冴ゆるも

渡部ゆき子

坪庭の南天枯れしにこだはれど今朝は小さき芽生え見つけぬ

目黒 富子

漸くに花芽つきたる山野草の鉢流さるに胸をさまらず

古川 英子

田の中の背丈越す稗泳ぐごと抜きゆく男が時に顔上ぐ

渡部ヨリ子

幾年も庭に伸びる蔓枝が初めて貴重な薬草と知る

新国 洋子

右指の節々痛くペンを持つこと難儀にて便りも書けず

(出 詠 順)

只見俳句会

八月例会

目黒十一

指導

訪ねける中陰の家著莪の花

吉 児

緑陰や助手席ドアに脚二本

草刈るや湖風通るはせを句碑
夏の霧刻々ふゆる只見川

礼

邦 夫

花茗荷一つ仏へ上げ申す

合歓の花つかかけ草履のまま出でて

尾瀬ヶ原日光黄菅いちめん
五月雨や誦経聞こゆる阿弥陀堂

信

笑 羊

遠雷やダンス教室眩し過ぎ

ト口箱の鱗の眼の空へ向く

すっぽりと山をつつみし夏の雲
昼顔の頭下げいる庭の宵

藤 彦

リウコ

空梅雨や母の使いし部屋に臥し

会津路やどこの家にも立葵

悼 忠平さんを送る
灯火を分けて旅立つ秋暑かな
地球儀の小さき文字や夏早

恒 夫

都

夕立や陽差しの届く勝手口

砂糖漬け塩漬け手加減梅漬ける

梅雨晴間朴歯の足駄音立てて
夏草や作付されぬままの畑

又 壺 歩

一 穂

鯉見えぬ池の濁りや大夕立

朝顔や数えいる間に日の昇り

邦 男

防災の避難訓練螢飛ぶ
亡き妻へ供養念佛夏立てり